
アリスの鎮魂歌-Another World-

ヒナユ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリスの鎮魂歌 - Another World -

【NZコード】

N1371F

【作者名】

ヒナゴ

【あらすじ】

アリストテレスは、友人のシオンに誘われ、とある聖人の柩をふざけて開けてしまうのだが、それをきっかけに、ある組織に追われてしまい。

1 枠の謎と時計鬼（前書き）

B「要素・グロ要素は多少入る可能性がありますので、『』注意下さい。

登場人物

・アリストテレス＝ヴェレゼント

孤児院で育つたエルフの少年。本来の相性は「アリスト」なのだが、容姿の可憐さから暫し「アリスト」と呼ばれがちである。ある日シオンとアリシャスの枢を開けた事により、組織に追われてしまう。感情表現が苦手で、落ち着いている。

・シオン＝ガイア

アリスの親友。好奇心旺盛でたまに天の邪鬼な少年。猫の獣人だが、猫耳を嫌がっている。興味本位でアリシャスの枢を開く。

・アリシャス＝リデル

神聖とされるエルフの少女。ル・ノワール国ヒル・ブラン国の千年戦争を締結したとされるが、詳細は不明である。

・ルーダム＝トウイード＝ギルワイン

公爵家の双子の兄。吸血鬼。アリス達に出会い、護衛役になる。アリスを珍しく「アリスト」と呼んでいる。優しい優等生のようだが、怒らせると敵を皆殺しにしかねない。

・ルードイ＝トウイード＝ギルワイン

公爵家の双子の弟。兄と同じく吸血鬼でアリス達の護衛役だが、兄とは全く違ったタイプで、不良でタラシである。いつもへらへらしているが、何を考えているかは不明。

1 枢の謎と時計鬼

「アリス、見てみろよ。これがアリシャスだつてよ」
そう言つて、親友のシオンはふざけながらアリシャスの肖像画を指さし、アリストテレスにそれを見せた。

「アリスつて愛称はスペルミスだろ。俺はアリスト……」「うわっ、視ろよ！ あれが枢だぜ！」

「聞けつてば」

此処は聖アリシャス堂と名付けられた、言わば教会のような場所である。何故、此処に二人の少年がいるのか 順を追いながら説明していこう。

アリストテレスは幼い頃に両親を失くし、孤児院で育った天涯孤獨な少年である。茶髪碧眼で、十五歳とは思えない少女のような可憐な姿とミニハットが印象深いらしい。エルフであるために、耳が尖っている。本名はアリストテレス＝ヴェレゼントで、本来の愛称は『アリスト』なのだが、容姿の可憐さから『アリス』と呼ばれがちである。

一方、親友のシオン＝ガイアは十七歳で、アリスの兄のような、悪友のような存在だ。無邪気な性格だが、たまに天の邪鬼な部分もある。紫色の短い髪と紅い瞳が特徴的で、獣人であるために、耳は猫のそれと、（本人は嫌がるが）可愛い尻尾を持ち合わせているのだ。孤児院に来たのはアリスよりもずっと後なのだが、人懐っこい性格のため、内気なアリスともすぐに打ち解けたのだつた。

此処はル・ノワール国の中級英雄・アリシャス＝リデルが住んでいたステラ村である。そのためにアリシャスは奉られ、村にはエルフや獣人、吸血鬼や人間など、様々な種族が仲良く暮らしているのだ。

アリシャスが美しい女性だつたのは、茶髪碧眼のエルフの少女の肖像画を見る限り、誰もが理解できる事柄だ。しかし、千年前に終結させた戦争の中、アリシャスがどんな活躍をしたのか、知らない

人の方が断然に多い。何せ、それは歴史上でも明確ではなく、様々な力があるが、少なくとも、アリシャスという少女は千年続いた千年前のル・ブラン国との戦争を、たった一人で終わらせたというのは真実である。だからこそ、ル・ノワール国の偉人で一番人気なのは彼女なのだ。

ほんの一時間前までは、そのアリシャスの奉られた聖堂はそこに立っていた。

事の発端は、悪戯好きなシオンがアリスを誘い、聖アリシャス堂に乗り込み、彼女の魂が眠ると云われるアリシャスの柩の蓋を開けに行こうと言った事である。

「それにも、アリシャスって何したんだろうなー。あんな美人なのに、千年戦争を終わらせたとか。今じゃ、ル・ブラン国なんて存在さえしてねえし」

獣人のシオンは無意識に鼻で柩の匂いを嗅ぎながら、そんな事を呟いている。

アリスはあまり歴史には興味がなかつた。というより、孤児院で勉強を習つた事はあるが、基本的に勉強が好きではないため、アリシャスが何をした少女なのかなど、殆ど他人事に過ぎなかつた。

「ル・ブラン国って……架空の世界じゃないのか？」

興味のないアリスは淡々と述べる。

「お前つてば、本当に面白だなあ。俺はすごいと思うけどなあ。女なのにひとつこの国を守り抜いて、偉大なる王から勲章を授かつたんだぜ！」

「シオンって、よく国や王の事、賛美するよな」

「なつ、当たり前だろ！ 生まれた国なんだから」

シオンはムツとしてそう言つと、アリシャスの柩の埃を払い、蓋に手をかける。

彼はあまり勉強が得意でないくせに、よく全てを知つているかのように語り始めるのが悪い癖なのだ。

「さ、これがアリシャスの柩の中身だ！」

感動の瞬間は、呆気ないものだつた。

中には何もなかつたが、アリスには確かに視えた。

『アリストテレス 私が搜していたのは、あなたなのかも』

そんな声が聞こえたと同時に、アリスの身体は灼熱の地獄の炎に灼かれるような、ひどく熱い感覚に覆われ、意識が遠のいていつたのだ。

「アリス おい、アリス！」

シオンが名前を呼んでくれるのにかかわらず、意識の遠のいたアリスは、そのまま外に飛び出していった。

村に不満がある訳でも、決して誰かに恨みを持つている訳でもない。ただ、アリスは走り、目に付くものを片つ端から燃やしていくた。

燃やしても燃やしても、身体を包む灼熱は冷める事を知らず、燃やし足らずに、アリスは次々と村の建物を破壊していったのだ。

「バカ、アリス、やめろ！」

そう言って立ち向かったシオンと相打ちになり、その場に倒れた頃には、アリスは記憶を失っていたのだった。

*

気が付くと、アリスは村長の家に寝かされ、周りには数十人くらいの村人が心配そうにこちらを眺めている。

しかし、アリスには何をしたのか全く記憶がなく、不安げに口を開いた。

「俺は……？」

特に誰に訊いた訳でもないが、状況の分からないアリスは救いを求めるかのように、すぐさま問つたのだった。

「アリシャス様の預言は的中した」

村長が答える。

「アリシャスの預言？ 何だ、それ……」

すると、きよとんとしたアリスの態度に驚いたのか、村人たちは一斉に顔を見合させてコソコソと何かを話し始めたのだ。

「アリシャス様の預言とは、今から読み上げる文章にある『戦争が終結した千年後、再び世界が揺れ始める。しかし、希望はまだある。私の子孫が国を守り、眞実の平和へと導くのだ』 これはアリシャス様が書いたもので、最後の一ページの分はなかなか相手にされていなかつたんだが、まさか本当になるとはな」

村長は説明を交えて話し始めた。

「それに、この続きにはこうも書いてある。『しかし、子孫の力は不完全である。私の力と交わる事で、一時は暴走するだろつ』とな」

村長は読んでいた預言書らしき厚い本を閉じ、アリスを見る。

「現に、アリシャス様の子孫が今、暴走したからな」

どこからともなく怪我を負つたシオンが現れ、村長の話に繋げるようにな、その話題をさも最初から知つてゐるかのよつに入ってきたのだ。

どうしたものかアリスには分からなかつたが、彼は腕に包帯を巻き、包帯で片目を隠している。やんちゃな彼の事だから、きっと転んでしまつたのだろう。

「アリシャスの子孫？」

「お前だよ、アリス……とは言つても、お前がアリシャスの子孫だなんて、さつき知つた事だけだな」

「!?

驚愕してシオンを見る。

だつたら、アリスの両親もそつだつたのか 思えば、父親はアレクで、母親は。

アリスはある共通点に気が付いた。しかし、偶然かも知れないし、確信はない。

「いや、アリシャスとは苗字が違う。確かに、母さんの名前はアラ

スで、俺はアリストテレス……似てるけど、偶然だろ」「

証拠もないのに、あんな英雄の子孫だなんて言われても、嬉しくも何ともないのだ。それに、アリシャスとアリストテレスでは、発音も違う。

「いや、それが偶然ではないのだ」村長が云つ。「お前の母・アラスは、アリシャス様の預言に書かれた子孫が、アリストテレスだという事を悟つてな。死ぬ前に私や村の者にそう云つた 苗字の事だが、アリシャス様の直系の子孫はアリストテレス以外、あまり表立つてはいなかつたが、全てその力を引き継ぐ女だった。名が変わるもの無理はなかつただろう」「

村長は巻物のようなものをアリスに見えるように、広い台の上に広げ、指で指して説明した。

「家系図？ でも、アリシャスはエルフだよな。だったら、千年くらい生きててもおかしくねえんじや……」

それにシオンが口出しするが、何故かとがめられはしなかつた。「それに関してはよく分からぬが、アリスの家系は皆、人間の一生と同じくらい短い ほら、アリシャス様はこの村の男と結婚し、死ぬ前にこの預言書を遺したんだ。それも、見付かったのは十七年前で、アリスが生まれる前。預言にある千年後の子孫が、ちょうどアリストテレスとなる。本当は大人になるまで、黙つてているつもりだつたんだが……」

「なら、どうして云つた？」

「思ったよりも、預言による暴走が早かつたからな」

村長が何を云つているのか、アリスには理解出来なかつた。シオンとの悪戯の後、よく分からぬが眠つていて、気が付いたら此処にいたのだから。

ふと、アリスは氣絶する前の、誰かの言葉を思い出す。

あれはアリシャス本人だつたのだろうか。炎が身体の中を焼き尽くすような感じも、あの瞬間の全てが。

「暴走つて……俺、何もしてない」

しかし、アリスは何も思い出せないのだ。何があったのかも知らないし、覚えてもない。ただ目が覚めたら此処にいたという事実だけだ。

「本当に覚えてないのか！？」

シオンが顔を覗いてくる。

「お前、先祖の奉られる聖アリシャス堂をぶつ壊したんだぞ！？まあ、怪我人が俺だけだったのは、幸いだつたけどな……」

無関心なアリスに呆れたシオンは、ブツブツと言いながら腕の包帯を弄っていた。

「ふーん。ま、他の人に危害加えたらいけないけど、相手はシオンだつたし、俺の先祖のだからいいだろ」

興味なさげにアリスは言った。

これで他の村人に迷惑を掛けていたら、常識的に考えて、アリスの立場は悪い方向に向くだろう。しかし、シオンは原因を作った本人なのだから、それはそれで仕方ないとアリスは思ったのだ。

「無関心だな、本当に……」

シオンがそう呟くのと同時に、時計の針がカチッ、と鳴った。何気なく聞き流したが、もう一度聞こえ、一秒ごとの間隔で聞こえてくる。

しかし、この部屋には確かに時計はあるが、針は一秒ごとの間隔で音を立てるようなものではなく、むしろ一時間経つても、何のメロディーさえ鳴らないシンプルなものだ。

ならば、誰かの持つ時計の針が音を立てたのだろうか。アリスは辺りを見回せる立ち位置にいるが、そんな時計を持つている者がいるのなら、起きた時から聞こえている筈だ。その仮定からすると、今の中にも正式な出入口から部屋を出入りしなかつたから、何者かが侵入してきたとも考えられる。

しかし、アリスが音に耳を澄ましていると、それは徐々に心拍数が上がりしていくかのように、鮮明な音として聞こえ、更には耳元に時計を置かれているような感覚にも捕らわれるのだ。

「アリス、どうしたんだ？」

音声の硝でシオンの声が聞こえてくるが、アリスはそれに反応する余裕がなく、一秒一秒刻まれる時計の音を精神世界の中で聞いていた。

「時計が……」

「時計？」

「こっちに来る！」

自分でも何を云つてゐるのか、全く解らなかつた。

すると、眼の前には白いシルクハットを被り、金時計を持つた銀髪紅目の青年がどこからともなく現れたのだ。

白い兔の耳を持つてゐる獣人は、アリスを見るなり微笑んだ。

「やつと繋がつたね 愛しいアリス。俺と一緒にいで」

細いアリスの腕を掴み、大衆の前で連れ去ろうとする青年は、どこか病んでいるような顔をしてゐる。

どこから現れたのか そんな事を問う者は誰もおらず、ただ突然アリスと兔の青年を見つめていた。

「お前なんか知らないし、愛してもない」

「アリス、何を……俺だよ、ラビ。忘れたのかい？」

「よつて、お前に付いて行く義務は、俺にはないという訳だ」

ラビと名乗つた青年と、無関心で話の噛み合わないアリスは、掴んでくる手を振り払つてベッドから降りる。

「シオン、アリスを連れて逃げろ！」

村長が急にアリシャスの預言書をシオンに押し付け、ドアに向かつて歩いていくアリスを見て勢いよく言つた。

急な出来事に混乱するシオンだったが、ふと見上げたラビの表情に、彼は厚い預言書を抱き締めて凍り付く。

「アリスは俺だけのモノ……愛してるから、殺したい」

殺したい、殺シタイ、コロシタイ……その言葉がアリス達の頭の中で何度もリピートされる。

「全てが、アリシャス様の、預言通り……」

そう云つた村人達がアリス達の逃げ道を確保しながら、ラビに立ち向かつていった。

しかし。

「アリス、逃げるぞ！」

茫然と座り込んでその殺戮を見ていると、シオンに手を引かれ、後は無意識のまま走っていた。

何も考えられない。急に現れた獣人の青年に、親しくしていた村人を殺された

アリスの発言のせいだ。

ただひとつ解る事は、無関心だった故に、こんな惨事を招いてしまった事だけだ。

アリスとシオンは逃げ続け、気が付いた頃には何もない平原を越え、隣の街に着いていた。

2 双子の思案

アリスは一緒に逃げてくれたシオンと共に、遙か地平線の彼方に佇むステラ村が、真っ赤に燃えていく景色をただ眺めていた。

着いた街は知らない隣街・デネブで、今まで村から出たことがないため、ル・ノワール国の首都でもないのに、かなり都会のようを感じてしまう。

傷心したアリスは、シオンの後をとぼとぼと付いて行く。またラビとかいう獣人は襲ってくるかも知れないし、今度はシオンさえも殺されてしまうかも知れない。

生まれ育った場所は、突然現れた兎に滅ぼされた。こうなつた以上はもう、アリスの戻る場所などない。

「アリス、元気出せよ……お前のせいじゃないんだしさ」

シオンは話し掛けてはくれるもの、村長に預けられた預言書ばかりに集中し、アリスの方は疎かになつてているのは間違いなかつた。街に入る事もせず、彼は街に入る手前の木に背中を当て、黙々と分厚い本を読んでいるのだ。

「アリシャスは千年後の今まで預言して、こつして書物にしてんだな。アリスの暴走は、最後から一ページ目に出てきたぜ……でも、一番最後の文字列だけ、意味解んねえ」

シオンは街中で本を読みながらブツブツと云つた。

「『黒の王子が紅に寝返る時、白と黒は紅によつて滅ぼされるだろう。黒の王子の鍵を奪い、倒す時、真の平和が訪れる』って……ああ、何を意味してんだろ」

シオンは村人があんなに殺されたにも関わらず、木に縋つて本の謎を解こうとしているのだ。

アリスにはそれが許せなかつた。

「村人が死んだのに、何してるんだ。大体、お前がアリシャスの柩を開けなければ、こんな事には……」

苛々したアリスはシオンに当たる。確かに、アリスも悪かった。だが、シオンがあんな事に誘い出さなければ、こんな事にはならなかつたのだ。

「申し訳ないよ……だからこそ、託してくれた本の謎を解くんだ

村長達は、村が滅びるのを知っていたみたいだし」

いつもは感情的なシオンと、冷静で無関心なアリス。しかし、今は違つたのだつた。

「……俺、晩飯搜してくる」

苛々した果てに、アリスはシオンから離れてやるうとした所を考えた。アリスがいなくなれば、きっと責任を感じて、追いかけて来るに違いない。

そう思つた瞬間に口に出し、シオンの返答も聞かずに飛び出して行つたのだつた。

*

アリスはと云つて、都会の街・デネブで迷い込んでいた。

可愛い容姿に釣られた男たちが声をかけてくる。可憐な容姿への自覚はないが、幼く見えるのは十分に自覚していたので、忌ましいペドフリリアに違ひない事は分かつていた。アリスはそういう嗜好を持つた男が大嫌いで、見るだけでも鳥肌が立つのに、シオンは追いかけても来なかつた。

やがて行き先の分からなくなつたアリスは、疲れ果てて誰もいない森の方へと足を運んでいた。田舎育ちだから、都会のような人混みはどうしても苦手なのだ。

大きなキノコや小さなキノコがある不思議な森に足を踏み入れると、奥の方から男同士の言い争う声が聞こえてくる。

「ルーディ？ 貴方が僕の大切な腕輪を壊したのでしょうか。素直に謝りなさい」

「あーあー、相変わらず偉そなんだから。食べちゃうぞ」

「喧嘩、売つてているのですか？」

「そうだよ、優等生さん？」

大きなキノコの陰から覗くと、金髪碧眼の美しい青年が、同じ顔をした黒髪紅眼の青年に殴りかかるとしているのだ。違うものといえば髪型だけで、金髪の方はセンター分けで格好よく整えていて、黒髪の方はシックにウェーブがかかっている。

どうすればいいのか分からぬアリスは、ひやひやしながら眺めていると、黒髪の方の青年と眼が合ってしまう。

「おや。可愛い見学者が、ひとり」

殴り掛かられていたのに関わらず、アリスを見てにつこりと笑つた彼は、怒らずに手招きしてくれた。

「見掛けない子だね。俺と付き合わない？」

一方で、金髪の青年はアリスを見るなり、ニヤニヤ笑いながらそんな事を云つてきた。

怖くなつたアリスは、再びキノコの陰に隠れる。

「ルーディ。そんな事を云つては、人道に反しますよ」厳しい口調で金髪のルーディに言い付け、黒髪の青年は再びアリスを見て微笑んだ。「怖くないから、おいで。此処は迷いの森ですよ。慣れていなければ、迷つてしまつ」

罷かも知れないのに、何故か彼の云つことには信憑性がある。アリスは恐る恐る、一步を踏み出し、またもう片方の足を前に出し、二人のいる場所に歩いて行く。

よく見てみると、二人は色違ひのマントを羽織つてゐるのだ。

「僕はルーダム。此方は、双子の弟のルーディです」

黒髪のルーダムは黒が基調だが、ところどころにハートとダイヤのマークが散らされている。金髪のルーディは逆で、紅が基調なのだが、クローバーやスペードが飾りとなつてゐるのだ。

「俺はアリストテレス……助けてくれ。ステラ村が滅ぼされた」

何故だか、彼らには頼れるような気がして、ぺたりと地面に座り込んで救済を求めたのだ。

すると、口調の優しいルーダムは、アリスと目線を合わせてくれた。

「それは本当ですか？ なら、アリストテレス。落ち着いて、説明して下さい」

アリスは頭の中を整理した。

「大丈夫だ。これでも、俺と此のガリ勉君は、ギルウイン公爵の息子だからな。童顔美人がどうしてもって云うなら、助けになつてやるぜ？」

ルーディはまたもニヤリと笑い、アリスの顎を持ち上げるが、ルーダムによつてそれが抑制されていた。

ギルウイン公爵　名前だけは聞いた事がある。何でも、デネブの貴族で、千年戦争でアリシャスの右腕だつた一族の末裔だそうだ。よくステラ村を援助してくれていたから、アリスでも名前を覚えていたのだ。

「俺達、アリシャスの柩を開けて……そしたら俺、暴走して……眼が醒めたら、あいつが出て来て、みんなを殺したんだ」

混乱してゐるアリスは、頭の中で云うべき事を整理しないまま、地面を視ながら茫然と、頭に浮かぶ言葉のみを口にしていた。

「おいおい、それじゃあ分かんねえぞ？ 大体、『あいつ』って誰だ？」

ルーディが顔を覗いてくる。

「ラビ……白い兎の獣人で……時計、持つてた」

ラビの事を思い出したアリスは、怖くなつて身震いをした。

「ラビ、と云いましたか？」

「ああ、そうだ。知つてるのか……？」

「詳しく述べませんが……ギルウイン家の云い伝えでね」

アリスの肩を支えたルーダムは、一緒に立ち上がりてくれた。

「云い伝え？ あんなモン信じねえよ、俺は」

ムツとしたようにルーディも立ち上がり、双子の兄に刃向かうよう投げやりに云つた。

「信じる信じないは貴方の勝手ですが、ギルウイン家に伝わるものですよ。大体、いつも不良の友達とばかり連んで、本当に……」「そんなのも、俺の勝手だろ。毎日勉強とか、しなくとも出来ちゃうし、退屈だし、モテないって」

「おやおや。僕は美形で勤勉な貴族ですから、女性からは人気がありますよ？ 不良の貴方と違つて」

「ふーん、そう？」

再び兄弟喧嘩が始まったかと思えば、精神的に大人な兄の方が優位に立つていた。

変てこで美形な双子の喧嘩が一時的に終わつて、辺りが静まる頃。ちょうどその時、遠くからアリスを呼ぶ声がした。

「アリス！ こんなトコにいたのかよ……」

駆けつけてきたのは、置き去りにしたシオンだった。

「シオン……ごめん」

背の低いアリスはシオンを見上げるが、悪いと思っているのに、反省したような素振りは出来なかつた。表情に自然と滲ます事を知らないのだ。

「お前、アリスちゃんの仲間か？ アリスちゃん、ボーアッシュで可愛いからつて、イタズラしてんじゃないだろうな」
ルーディがシオンをまじまじと見て呟く。

「は？」

シオンはアリスの身体を眺め、ルーディを見上げた。

確かに、この男は背も高く、美形である。馬鹿にそれでいるのだろうか、とシオンは腹を立てたのだ。

「ボーアッシュでか、アリスは男だ！ そりや、アリスは可愛いかも知んないけど、手出すなよ？」

「んー、でも、可愛いシオンちゃんの方が好みだから、大丈夫」
「やーめーろ！ 気持ち悪いんだよ、くつづくな！ 俺は可愛くなーい！」

抱きつくるルーディに、シオンはじたばたと抵抗しながらそう主張

するのだが、周りから見るとそういう訳でもないようだ。シオンはやんちゃだから、ただでさえ獣人であるが故の猫耳を嫌がっているので、それをからかつたら即喧嘩。だから、村の同級生は敢えて云わなかつたのだが、シオンは女顔とまではいかないが美形で、男から見てもアリスとは違つた魅力がある（と、誰かが云つていた）。

「ああ、マジ可愛い」

ルーディの方はシオンを離さない。

「ルーディ。その態度は失礼ですよ。シオンは嫌がつているのだから、離しなさい」

ルーダムは最初から二人には興味がないと、断定させるようにそう云つた。

「だつてよお、あんな事とかこんな事、期待するじゃん？」

ちえつ、といながら弟の方は頭の後ろで腕を組み、前を歩いて行つた。

ルーディが何を期待していたのかは分からないが、少なくともシオンは、この時ルーダムがいてくれた事にしみじみと感謝する。

「シオンは兎も角、アリストテレスは男性の名前なのに、全く……呆れたルーダムはアリスとシオンの前でそつ咳くと、気を取り直して後ろの二人を振り返つた。

「アリストテレス、シオン。君達を救済します。僕らに付いて来て下さいね」

につこりと微笑んだルーダムは、路頭に迷う二人を救つてくれたのだった。

*

豪勢な家に招待され、見た事もないようなすごく広い部屋に、すごく大きなテーブルが置かれ、純白のテーブルクロスの上に大量のご馳走が置かれている。

アリスもシオンも、その光景に眼が回りそうだった。

上座にはギル双赢公爵が座っている。公爵夫人はその隣に、そして、向かい側に双子の兄弟と、アリスとシオンが座られたのだ。食欲旺盛ではないアリスは兎も角、人一倍食べ物に貪欲なシオンは、まだ全てが並べられる前から食べ物を見て我慢していた。

「食べていいのだよ、お二人共」

公爵にそう云われ、

「はい！ ありがとうございます！」

と、元気よく云つたシオンは、そのまま料理にがつつき始めた。此處に来てようやく解つたのは、双子の兄弟も、ギル双赢公爵も夫人も、みんな揃つて吸血鬼だと云うことだ。

「アリストテレス、と云つたかな」

公爵はアリスを見て、不思議そうに云つた。

「はい」

こんな時の愛想笑いの仕方も分からぬアリスは、つい無表情で返答してしまう。

「アリシャス様は私の父を助けて下さった方でね。その頃、吸血鬼の地位は低く、虐殺されていたんだ。血を糧にしているから、仕方なかつたのだが、それを変えて下さったのが、アリシャス様なんだ」

「アリシャスが……？」

「そう。血を吸わなくても良い身体にしてくれ、同時に右腕として戦わせて下さった。それから戦争は終わり、ギル双赢家はこうして、栄える事が出来たのだよ」

公爵はそう語りながら、アリシャスへの感謝を言い切れないばかりに表現していた。

自分の先祖の事なのに、アリスは何も知らない。

「じゃあ、ルーダムさんも、ルーディさんも、二人共吸血鬼……ですか？」

敬語が苦手なアリスは、片言にそう効いた。

「そうですわよ。因みに、私も吸血鬼ですわ……」公爵夫人はそれ

からアリスをまじまじと見て、こう続けた。「それにしても、私はアリスのような可愛らしい子が欲しかったですわ。ルーダムもルーディも、それはそれは女の子のように可愛かったのですが、今はもう、跡形も在りませんし」

今も姿は若いまだが、彼女の実年齢が若かつた頃は、もっとノーブラチックな性格をしていたに違いない、とアリスは思った。

「母さん」

幻想に浸る母親に、双子の兄は呆れた様子で咎める。

「はいはい。ルーダムちゃんたら、しつかりし過ぎちゃって」

あまりに似つかない四人の家族を見つめ、アリスとシオンは顔を見合わせる。

「おいおい。早く本題に入らねえと、シオンちゃん攫つて部屋に逃げるぞ」

すると、イライラしたルーディがテーブルの上に長い脚を載せ、威張ったように腕を組んで、父親を睨み付ける。

「ルーディ、馬鹿を云うもんじやない、シオンはお客様だ」

暴言を吐く息子を軽く注意をするが、公爵はそれ以上咎める事はない。

育て方が悪いのだろうか。だとしても、兄のルーダムの方は品行方正なおぼっちゃまと言えるのに、どうしてこうも違つたのだろうか。

結局は、本人次第のようだった。

「アリストテレス、それにシオン。二人はル・ノワール？世陛下に、一度お会いした方がいいだろう」

公爵はワイングラスに手を掛け、そう助言してくれた。

その上、思いもよらぬ発言をするのだが。

「君達が安全になるまで、うちの息子達を護衛に付けよう」

これには、公爵と夫人を覗く四人が、同時に目を見開いたのだった。

それに一番反発したのが、云つまでもなくルーディの方だ。

「ルーダムもだと！？」

思わずテーブルに両手を付いて立ち上がり、身を乗り出して父親に抗議を始める。

「僕は構いませんよ。アリストテレスもシオンも、一人では無理でしょ？ それに、陛下に直接お会い出来るのは、ギル双赢家の名誉でもあるのですから」

ルーダムの方も優しいようで利己的な考え方だが、頭の良さは窺える。確かに、貴族家の跡継ぎなものもあり、国王陛下と交流するのは貴重なものだろう。

普通なら、一般民衆であるアリス達は、国王に謁見する事さえ難しいのだから。

「俺はゴメンだぜ。シオンちゃん達とならいいが、こんなクソ野郎と一緒に旅なんて、腐っちゃうだろ！」

しかし、ルーディは出世にも興味はなく、そっぽを向いて再び椅子に腰掛けた。

「ルーディ、私の云つ事を聞かないと、あの縁談の話を」

「そ、それだけは死んでも嫌だぜ！ それなら、まだクソ野郎と一緒にいた方が千倍マシだろうが！」

「なら、成立だな」

ルーディと公爵だけの内輪で解決したようだったが、それに納得出来ないシオンは公爵を目の前にして、公爵子息に向かつてタメ口でこう訊いたのだった。

「なあ、縁談の話って何だ？」

それでも、無邪気なシオンは咎められる事はない。

「貴族の変な女が俺に惚れたとかで、親父通して結婚させられそうになっちゃったんだ。もう、嫌になっちゃうわ」

ルーディは苦い思い出を嫌そうに語った。

「まあ、それはどちらでもいいのです。問題は、襲われたら落とされる可能性がある為、航空機や船が使えないという事ですね」

シオンの感想も聞かないまま、どうでもよさそうにルーダムは話を本題に戻し、呆れたように腕を組む。

「さすがルーダムは頭がいいな。だが、それは想定済みだ。だからこそ、お前達に任せることだ」

公爵はきつぱりとそう決定させた。

「解っています。今こそ、ギルウイン家がアリシャス様に恩返しをする時なのですね」

ルーダムはアリス達を助けるためのリスクはあまり気にしておらず、むしろ首都ベガまでの道はスマーズに行けるという考えのようだった。

容認せざるを得ないルーダムは、何も言わずに煙草を吸い始める。「アリスちゃんもシオンちゃんも、今夜はゆっくりしていって下さいませ。ルーダムちゃんはせっかちですから、明日には旅立つのでしょうか？」

公爵夫人はにっこりと笑つてそう云つたが、寂しそうだった。

アリスとシオンは孤児院にいた頃からは考えもつかなかつた、とんでもない貴族と交流し、ましてやその子息に守られようとしているのだ。

旅の行方は、未だに解らない今まで、ラビが誰のかも、謎は解けることはなかつたのだが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1371f/>

アリスの鎮魂歌-Another World-

2010年12月8日00時14分発行